

中国における一人っ子を亡くした親への心理的援助の現状と課題

—CNKIの文献分析に基づくレビュー—

王 小 鳳*

The current status and challenges of psychological help for parents who have lost their only child in China:

Based on the analysis of literature in CNKI

WANG Xiaofeng

Abstract

In 2021, China implemented a national three-child policy. Nevertheless, the one-child policy implemented between 1979 and 2015 has played a role in the increase in the number of “Shidu parents”. They lost their only child and are now struggling to have another child. This study was designed to review the research literature on the current status and challenges of providing psychological help to Shidu parents, with a view to identifying the types of psychological help provided to Shidu parents, and discussing the ways in which appropriate support can be developed. By utilizing the CNKI database, this study conducted a comprehensive search with the keywords “失独”, “心理援助”, “心理救助”, “精神慰藉”, and “心理帮扶”, which obtained a total of 9 relevant research papers. The literature is categorized into (1) psychological counseling and therapy, (2) group psychological interventions, (3) casework by social workers, (4) group work by social workers, and (5) homogeneous mutual aid. Future research and policy are expected to address these challenges, and explore ways to improve the accessibility, effectiveness, and utilization of psychological help for Shidu parents or bereaved parents in other countries.

Keywords : parents who have lost their only child in China, psychological help, the current status and challenges, literature review, CNKI

はじめに

家族や愛する人との死別は、人生最大の試練とされることが多く、非常にストレスフルなライフイベントとして位置づけられている (Holmes & Rahe, 1967)。特に、子どもとの死別は顕著なストレスであり (何他, 2014)、死別した子どもが自分にとっての唯一の子ども (以下、一人っ子) である場合、そのストレスの大きさはさらに顕著となる。

中国では1979年から2015年12月までの約36年間、「一人っ子政策」が国策として実施されていた。この政策の導入は、中国における出生数の4億人以上の減少につながり、経済発展に寄与したとされる (周・劉, 2020)。しかし、この政策には副作用も伴い、一人っ子家庭の増加が複数の社会的問題を引き起こした。特に深刻なのは、事故や病気などで一人っ子を亡くし、年齢などの理由で新たに子どもを持つことができなくなった家庭の増加で

キーワード：中国の一人っ子を失った親、心理的援助、現状と課題、文献レビュー、CNKI

*平成4年度生 人間発達科学専攻

ある。これらの家庭の親は「失独者」と呼ばれ、彼らの心理的苦痛は測り知れないほど深いものとなっている。この中国特有の失独者問題を深く理解するためには、中国の社会背景と国際的な視点から失独者の心理的苦痛に関する議論が必要である。

中国の背景と国際的な視点から見た失独者の心理的苦痛

中国以外の国々（以下、他国）でも、子どもを亡くした高齢の親が存在している。失独者は、子どもを亡くした高齢者のこととして捉えられる。もし他国の家庭でも子どもを一人しかもっていなかった場合、その子を亡くした高齢者も失独者として分類されうる。そのため、他国の子どもを亡くした高齢者に関する研究も失独者に関する知見を深めるうえで参考となる。例えば、欧米諸国の研究によれば、子どもを失うことが親の精神的健康にとって多大な脅威であるとされている。具体的には、子どもと死別した親は、非遺族の親に比べ、抑うつ、不安、孤独感、悲嘆、心的外傷後ストレス障害の症状をより多く示した (Harper, O'Connor, & O'Carroll, 2014)。さらに、子どもと死別した母親は、夫と死別した未亡人やその遺族の娘よりも抑うつの度合いが高いという結果も示されている (Leahy, 1995)。

しかし、中国の失独者が直面する課題は他国の子どもを亡くした高齢者よりも厳しいものだと考えられる。主な理由としては、多くの失独者が一人っ子政策の下で、子どもを一人のみ持つ状況に置かれていたことが挙げられる。その一人っ子が亡くなった場合、失独者は政府への怨みや不信感を抱えることが多い。実際、一部の失独者が抗議活動への参加などの行動を取っていることも知られている。中国において2016年の二子政策や2021年の三子政策の導入を考慮すると、これらの政策の変更がもたらす社会的な影響はより大きくなる。加えて、中国の文化や伝統では、子どもが家の継承者としての役割を強く持つため (Zimmer & Kwong, 2003)、その子を失うという事態は、心理的のみでなく家系の継続という意味でも非常に大きな影響を及ぼす。このような背景において、「因果応報（善い行いは善い結果を、悪い行いは悪い結果をもたらす）」(陳, 2016) や「伝宗接代（血筋を後代に引き継ぐ）」といった伝統的な価値観が内面化されることで、失独者は自己疎外やスティグマ (安・徐, 2018) などの課題に直面する。さらに、中国の伝統的な家族構造においては、子どもには老後の親を面倒するという役割が期待されており、その子どもを失うことは経済的、社会的、心理的な打撃となる (肖・楊, 2014)。これらの要因を総合すると、他国と比べて、中国の失独者が経験する心理的苦痛は単に子を無くすということ以上に大きいものであると考えられる。

失独者の定義と人数

失独者とは具体的にどのような人たちを指すのか。研究や文献により失独者の定義は異なるが、年齢やその他の条件を基にした複数の定義が提案されている。柳 (2012) は、失独者を、一人っ子が病気、交通事故、犯罪、労働、自殺、災害等の原因によって死亡し、さらに年齢や他の状況から新たな子どもを持つことが不可能となった50歳以上の親と定義している。失独者の年齢については複数の基準が存在しており、姚 (2020) は60歳以上、馮ら (2015) は、失独母親の年齢範囲を30歳から64歳としている。さらに、陳 (2013) は、失独者を「広義の失独者」と「狭義の失独者」の2つに分類している。陳によれば、広義の失独者は、一人っ子が死亡したすべての親、狭義の失独者は、一人っ子が死亡した後に再出産や養子縁組を行っていない親を指している。失独者に関する主な文献や政策は、陳による狭義の失独者に重点を置いていることから、本稿も狭義の定義をもとに議論を進める。

失独者に関する定義の違いから、失独者の人数の推定には異なる見解が提起されている。陳 (2013) は、2010年の人口調査データをもとに、2010年時点での広義の失独家庭は851.7万世帯、狭義では63.5万世帯以上と推算している。王 (2013) は、2010年時点で中国における一人っ子を失った家庭は100万世帯以上としている。一人っ子政策が2015年に終了しても、失独者の数は増加の一途をたどっているとの報告がある (王, 2016)。失独者数の増加は、個人の問題にとどまらず、中国社会全体の課題としても取り上げられるようになってきている (高, 2015)。これらの背景や状況を理解することで、失独者の精神的健康状態やその心理的援助の必要性について深く捉えることができると考えられる。

失独者の精神的健康の現状と心理的援助の重要性

失独者は、経済的困難、疾病に伴う苦痛、老後の生活の困難などの問題に加えて、深刻な心理的苦痛も経験しているとされる（王, 2013）。張他（2017）によれば、失独者の中には深刻な抑うつ、不安障害、孤独感を抱える人が多いことが指摘されている。これを裏付けるように、Cao et al.（2018）は、失独者の精神的健康が非遺族の親に比べて著しく損なわれていることを報告している。さらに、張・賈（2019）は、失独者における大うつ病性障害（94.7%）、不安障害（82.6%）、心的外傷後ストレス障害（47.9%）、および長期の悲嘆（23.4%）の経験の割合が高いことを示している。これらの実証研究から、一人っ子との死別は強いストレスを感じるライフイベントとして死別後の親の精神的健康を著しく損なうものであることが確認されており、心理的援助の必要性が強く示唆されている。

しかし、中国の失独者に対する心理的援助の法的枠組みは未だ確立していない（戚, 2015）。中国政府が失独者に対して経済的援助を続けている一方で、失独者に対する心理的援助が不十分であり、その需要が満たされていないとの指摘がある（丁, 2013）。一方で、その必要性を認識し、心理的援助に関する取り組みを行ういくつかの地方政府や学術分野も存在するが、これらの実践や実証の多くは、社会保障や老後ケアの視点から行われている。

今後も増加すると予想される中国の失独者に対する心理的援助の充実のためには、中国の失独者に関する心理的援助の現状と課題の概観と、課題の抽出が必要と考えられる。そのためには、先行研究の詳細なレビューが必要であるが、筆者の調査範囲では、失独者に関する心理的援助に特化したレビューは朱（2019）のみである。しかし、この論文は心理的援助のみに焦点を絞ったものではなく、心理的援助の分類に関しても「ソーシャルワーカーによるグループワーク」及び「心理カウンセリングと治療」のみが言及されており、その内容は網羅的とは言えない。

目的

中国における失独者に対する心理的援助の現状の概観と課題探索をめざし、本研究は、失独者に対する心理的援助の効果に関する論文のレビューを行う。これを通じて、中国全土の失独者への心理的援助の現状や課題を総合的に考察する。さらに、得られた知見を基に、新たな心理的援助の方向性や取り組みの提言を行うことが本研究の目的である。

本研究の成果からは、失独者への援助を行う関係者や政策立案者にとって有益な情報となることが期待されている。失独という現象は中国独特のものであるが、本レビューにより得られた知見は、中国国外の子どもの喪失を経験する親に対する心理的援助について示唆を与えるものになると考えられる。

方法

分析対象

中国のオンラインデータベースであるCNKI（China National Knowledge Infrastructure）を使用し、2001年1月から2023年5月までの期間に掲載された中国語文献を対象に検索を行った。CNKIは複数のサブデータベースから構成されているが、データの連続性、質、充実度を確保するために、学位論文データベースなどは除外し、雑誌データベースのみを対象とした。検索キーワードとして、「心理援助」、「心理救助」、「精神慰藉」、「心理帮扶」を用い、これらのキーワードに「失独」を組み合わせて文献を検索対象とした。さらに、取得した文献の引用や引用元を通じて、検索条件に該当すると思われる文献を追加文献として分析対象に加えた。

文献の抽出方法

文献の抽出に際して、以下の基準を採用した。

包含基準：（1）中国語で書かれた論文、（2）中国の失独者の心理援助に関する実証研究（量的および質的論文を含む）、（3）2023年4月までに公開された査読付き論文。

除外基準：（1）中国の失独者を対象としていない論文、（2）学位論文、レビュー論文、書籍の一部（例：一章）。

分析方法

収集した文献を詳細に読解し、心理援助の方法や内容に基づいて分類作業を行った。その結果を基に、失独者への心理援助の現状と課題についての情報整理を行った。

結果

対象文献の概要

検索キーワードの「心理援助」、「心理救助」、「精神慰藉」、「心理帮扶」と「失独」を合わせて文献を検索した結果、43件の文献を初回で抽出した。次に、これらの文献の引用や引用元を確認し、8件の文献を追加し、合計51件の文献を分析対象として選定した。続いて、これらの文献の抄録を検討した結果、重複文献や研究テーマに該当しない文献、心理的援助を主としていない文献、実証研究ではない文献を除外し、最終的に9件の文献に絞り込んだ。

文献数の年次推移については、2014年に1件、2015年に2件、2017年に2件、2018年に2件、2020年に1件、2022年に1件であった。

研究手法は、4件が量的調査であり、すべて介入実験であった。残る5件は質的調査であり、そのうち、事例研究が2件、フィールド調査が2件、インタビュー調査が1件であった。

失独者への心理援助の方法については、「心理カウンセリング及び治療」という個人療法が2件、「グループ療法」が2件、「ケースワーク」が1件、「グループワーク」が1件、「失独者の自助」が3件という分布であった。これらの文献の概要を表1で示した。

文献の質評価に関して、選定された9件の研究全てにおいて、介入後の効果への追跡調査が未実施であった。報告の完全性において、楊・李（2018）では、研究方法の記載が不足しており、介入期間が明確に示されていない。同様に、程・程（2020）においても、研究方法の報告が不足しており、観察回数や観察の手法についての明確な記述が欠けている。劉（2014）の研究は中国全土のデータを用いたが、他の研究は地域に特化していた。例えば、杭他（2015）は安徽省のみを対象としていた。介入実験を採用した4件の量的調査において、杭他（2015）と朱他（2022）は対照群を設けており、ランダムに割り当てた。特に、朱他（2022）は二重盲検試験を実施した。一方、王他（2017）は対照群の存在を明記しているが、ランダムに割り当てたかどうかについては記述していない。尹他（2018）は対照群を設けなかった。

援助方法別に見た失独者への心理援助の内容

失独者に対する心理的援助の現状を把握し、各援助法の特徴、効果、および課題を理解するために、援助方法を基に、9件の文献を特定のカテゴリーに分けて分類した。これらのカテゴリーは、心理専門家による「心理カウンセリング及び治療」と「グループ療法」、ソーシャルワーカーによる「ケースワーク」と「グループワーク」、「失独者の自助」であった（表1）。各カテゴリーには、その援助法に関連する文献が割り当てられ、それぞれの援助法の特徴と効果を探求することが可能になった。以下、各援助法についての具体的な説明を示した。

1) 心理専門家による心理カウンセリング及び治療に関する研究

個別のオンラインカウンセリングと対面カウンセリングに関する研究（杭他, 2015）、マインドフルネスストレス低減法に関する研究（高他, 2015）の2件が抽出された。具体的には、以下の通りである。

杭他（2015）は、失独者の抑うつに対する心理カウンセリングの効果性、ならびにオンラインカウンセリングと対面カウンセリングの効果の違いを検討した。調査は207名の失独者を対象に、うつ性自己評価尺度（SDS）を用いた結果、中程度の抑うつ症状（SDS標準スコア=63-72）を示した48名の対象者が自主的に該当研究の介入実験に参加した。参加者はオンラインカウンセリング群、対面カウンセリング群、および対照群にランダムに割り当てられ、それぞれ16名ずつとした。カウンセリングが週1回、10週間にわたって実施された。介入効果は、介入前後のSDSおよび孤独感尺度（UCLA）によって評価された。その結果、オンラインカウンセリング群と対面カウンセリング群のSDSおよびUCLAの介入後の測定値は、対照群よりも有意に低かった。介入後の測定値は、

表 対象文献の概要

分類	番号	著者	表題	対象者	方法	介入法期間	結論
心理カウンセリング及び治療	1	杭他 (2015)	失独者に対する心理カウンセリングの抑うつと孤独感への介入効果の観察	中程度の抑うつ症状を示す失独者 48名	介入実験	オンライン及び対面のカウンセリング 10週間	1) 心理カウンセリングにより、失独者の抑うつおよび孤独感を緩和させることができる。 2) 対面カウンセリングは、オンラインカウンセリングと比べ孤独感の軽減において優れている。
	2	高他 (2015)	マインドフルネス介入による失独者の情緒問題の改善	失独者 1名 (女性、64歳)	事例研究	マインドフルネスストレス低減法介入 4週間	マインドフルネス介入により、失独者のネガティブな感情、孤独感、および抑うつは低下させることができる。
グループ療法	3	朱他 (2022)	集団認知行動療法を用いた失独者の不安・抑うつへの介入効果	失独者 50名	介入実験	集団認知行動療法 10週間	集団認知行動療法により、失独者の抑うつおよび不安を緩和させること、社会的機能の回復と生活の質を向上させることができる。
	4	王他 (2017)	失独者において集団心理的介入が抑うつ、不安、および生活の質に与える影響	失独者 69名	介入実験	集団心理的介入 1年	集団心理的介入により、失独者の抑うつおよび不安を緩和させ、生活の質も向上させることができる。
ケースワーク	5	楊・李 (2018)	絶望からの再生：失独者の心理援助におけるソーシャルワークのアクションリサーチ	失独者 1名 (男性、55歳)	事例研究	アクションリサーチ 介入期間不明	アクションリサーチに基づいたソーシャルワークの個別的介入により、失独者の心理的問題を改善させることができる。
グループワーク	6	程・程 (2020)	集団エンパワーメントの視点からのシチュエーションナラティブ研究 - D協会の失独者への援助事例を基に	失独者援助協会1ヶ所 (所属する失独者 100名以上)	フィールド調査	-	1) 失独者をアウトドア活動に参加させたり、相互支援の活動を行ったり、協会の役割を担わせたり、他者を支援する活動を展開させることにより、彼らの社会的交流の範囲や行動のスペースを拡大し、自分の価値を感じる機会を提供できる。 2) 失独者が政府と組織的かつ効果的にコミュニケーションを取るようになり、誤解を解消することにより、彼らの内的な自己エンパワーメントと外的な社会的エンパワーメントを促進させることができる。
失独者の自助	7	尹他 (2018)	コミュニティベースの自助式中国画学習グループを用いた失独者の心理健康の向上研究	失独者 26名	介入実験	自助式中国画学習グループ 6ヶ月	コミュニティベースの自助式中国画学習グループにより、失独者の心理健康を向上させることができる。
	8	陳 (2017)	二つのタイプの失独家庭におけるソーシャルサポートの比較研究 - 失独者の自助グループの影響を中心に -	失独者 36名、計画生育委員会の職員 2名	インタビュー	-	失独者の自助グループに参加している失独家庭と参加していない失独家庭では、ソーシャルサポートの受け取り状況の違いが確認される。前者は、フォーマルなソーシャルサポートが多い一方で、インフォーマルなソーシャルサポートが減少している。一方、後者はフォーマルなソーシャルサポートは少ないものの、インフォーマルなソーシャルサポートの影響が相対的に顕著である。
	9	劉 (2014)	失独QQグループおよび失独者のオンライン集合現象の研究	失独QQグループ 14グループ	フィールド調査	-	失独QQグループを含む様々な脆弱な組織や自己組織を包括的に受け入れ、支持し、育成し、その長所を伸ばし、短所を避けることは、政府の不可欠な取り組みとすべきである。

介入前の測定値よりも有意に低かった。特に、対面カウンセリング群のUCLAスコアの減少値は、オンラインカウンセリング群よりも有意に高かった。しかし、SDSの減少値に関する群間差は有意ではなかった。以上の結果から、心理カウンセリングは、失独者の抑うつおよび孤独感の軽減に有効であり、特に対面カウンセリングはオンラインカウンセリングに比べて孤独感の改善効果が優れていると推察される。

高他 (2015) は、失独者に対するマインドフルネス介入の効果について検証した。具体的には、1名の失独者を対象に、4週間のマインドフルネスストレス低減法の介入を行い、毎週1回の7時間の対面研修と、毎日30～45分のマインドフルネス実践を実施した。評価ツールとして、5因子マインドフルネス尺度、ポジティブ・ネガティブ感情尺度、孤独感尺度、不安自己評価尺度を使用し、介入前後の変化を評価した。加えて、失独者からの感想も収集した。結果として、マインドフルネス介入後の失独者のネガティブ感情、孤独感、及び抑うつが有意に軽減し、マインドフルネスの度合いが向上したことが示された。この結果により、マインドフルネス介入が失独者の情緒的問題の改善に寄与する可能性を示した。

2) 心理専門家によるグループ療法

集団認知行動療法に関する研究 (朱他, 2022) と集団心理的介入に関する研究 (王他, 2017) としては2件の文献が抽出された。具体的には、以下の通りである。

朱他 (2022) は、集団認知行動療法による失独者の不安・抑うつへの介入効果を検討するために、上海市奉賢区金匯町及び金海コミュニティ内の不安と抑うつの傾向が高い50名の失独者をランダムに介入群26名と対照群24名に分けた。対照群は家庭医の契約健康サービスを受け、実験群はこれに加えて10週間の集団認知行動療法を受けた。療法の効果を比較するために、介入後に抑うつ、不安の程度を評価した。その結果、10週間の介入後、実験群の失独者の抑うつおよび不安は対照群より低く、統計的に5%水準で有意差が認められた ($p < .05$)。集団認知行動療法は失独者の不安や抑うつの感情を改善するのに役立ち、社会的機能の回復と生活の質の向上を促進すると結論付けられた。

王他 (2017) は集団心理的介入による失独者の抑うつおよび不安の軽減効果を検討するために、69名の失独者を対象とし、対照群43名と介入群25名に分けて介入実験を行った。対照群は通常の家医医療契約サービスを受けた。通常の家医医療契約サービスは、毎月の慢性病の定期診断、紹介、健康教育、集中講義1回、そして合理的な食事、運動、薬物療法、自己モニタリングなどのテーマに基づく指導と、それに対応する健康処方箋の提供が行われた。介入群は、対照群で提供されたサービスに加え、2週間に1回の特定の時間、特定の場所での集団心理的介入を毎月2回受けた。介入の目的は、失独者が自身の潜在的なリソースを効果的に活用できるようにサポートし、真摯で安全でオープンなインタラクションの環境を形成し、失独者の心理的成長を促進することであった。その結果、介入群は、不安と抑うつのスコアが対照群に比べて明らかに低下し、統計的に有意差が認められた ($p < .05$)。よって、集団心理的介入は、失独者の不安や抑うつを緩和させることができると推定された。

3) ソーシャルワーカーによるケースワーク

ソーシャルケースワークの行動研究 (楊・李, 2018) として、1件が抽出された。

楊・李 (2018) は、Gerald Susman (1983) のアクションリサーチモデルを基に、55歳の男性失独者1名を対象として、問題の診断・定義、行動計画の策定、行動の実施、問題の再評価、総括的な反省の5段階を通じて研究を行った。ここでは、危機介入 (生活の世話や感情のサポート)、グリーフケア (故人との対話)、心理的回復 (精神的な慰め、社会活動の再開、経済的援助) の3つのアプローチを中心に介入が施された。介入前後のインタビューにより、該当の失独者は、介入以前は、終日絶望に陥っており、食べない、眠れない、社交活動の断絶といった状態に置かれていた。介入後は、生活リズムが整うようになり、仕事復帰、社会活動への積極的参加など、心理的健康の回復が確認された。この結果は、ソーシャルワーカーによる介入が失独者の心理的問題に対する効果的な手段であることを示していると考えられた。

4) ソーシャルワーカーによるグループワーク

ソーシャルグループワークについては、程・程 (2020) の研究が1件抽出された。

程・程(2020)は、南昌市のD協会では2016年から2019年までの3年間、失独者に関するボランティア活動の参加を通じ、自然観察法を用いてD協会の援助動向を調査した。特に、「援助を受ける段階→互助の段階→他者援助の段階」の流れに焦点を当て、その手法と効果を明らかにした。D協会は失独者援助組織であり、100人以上の失独者が所属され、そのうち20人以上が活動を通じて、うまく援助される側から援助するボランティアへの転換ができた。研究結果として、失独者が以下の3つの段階でエンパワーメント(力をつける)を体験したことが明らかになった。①援助を受ける段階:失独者は、アウトドア活動や各種祭りに参加し、失独者というラベルから解放され、自由な状況での体験を身につけ、信頼関係を築く機会を得られた。②互助の段階:失独者同士がケアし合い、病院での見舞いなどを通じて、彼ら自身の能力を向上させる過程で、自らを「主役」と感じるようになり、エンパワーメントを強化した。③他者援助の段階:失独者はボランティアとして活動し、政府や地方コミュニティのリーダーとの対話を通じて、自身の社会的価値を創出し、政府との良好な関係を構築した。結論として、アウトドア活動への参加、相互支援、協会の活動、及び他者への援助は、失独者の社会的交流や活動の範囲を広げ、自己の価値を肯定する機会を提供している。加えて、失独者が政府との効果的なコミュニケーションを確立することは、彼らのエンパワーメントを内外的に促進する要因となっている。

5) 失独者による自助

失独者の自助グループに関する研究について、コミュニティベースの自助式中国画学習グループ(尹他, 2018)、失独者の自助グループ(陳, 2017)、失独QQグループ(劉, 2014)に関する3件の研究が抽出された。具体的には、以下の通りである。

尹他(2018)は、北京の失独者を対象に、コミュニティベースの自助式中国画学習グループが心理的健康に及ぼす効果を調査した。26名の失独者を対象として6ヶ月の自助式中国画学習グループ活動を実施し、活動終了後に20名が半構造化インタビューを受けた。その結果、この学習グループが失独者にもたらした効果は、生理的症狀の改善、ポジティブな感情の体験、ネガティブな感情の調整、認知能力の向上、不合理な信念の調整、人生の意味の再認識などの6つの点において顕著であった。介入効果の要因として、アート実践の集中、アートの美的体験、情緒の表現の支援、文化的背景による人生の洞察の促進、学習結果による自己認識の向上、対人関係のインタラクションの促進、ソーシャルサポートによるレジリエンス(困難をしなやかに乗り越え回復する力)の強化が挙げられた。コミュニティベースの自助式中国画学習グループは、失独者の心理的健康レベルを向上させることができるため、その普及に価値があると考えられる。

陳(2017)は失独者の自助グループに参加している失独家庭と参加していない失独家庭におけるソーシャルサポートの取得状況の違いを検討するために、A省とB省での実地調査を実施した。2つの省の計画出産委員会から2名の職員と、22の失独家庭(合計36名の失独者)を対象にインタビューを行った。結果として、失独者の自助グループに参加する家庭は、専門職によるフォーマルなソーシャルサポートを多く受けているが、家族、友人、近隣、ボランティアによるインフォーマルなサポートは少ないことが示された。反対に、自助グループ参加していない家庭は、フォーマルなサポートは少ないものの、インフォーマルなサポートからの影響が強く認識された。

劉(2014)は、失独者向けのグループや、彼らのオンラインでの集まりの現象を調査する目的で、QQというSNSを使用し、「失独」というキーワードで活動グループの検索を行い、44件の失独者用QQグループを確認した。劉は「失独問題研究者」としてこれらのグループへの参加をリクエストしたところ、44のグループのうち、14のグループが彼の参加を承認した。劉は、この14のグループを対象にフィールド調査を実施し、以下の結果を得た。1)失独QQグループのメンバーは主に40~60歳の女性で、子どもを亡くしてから約10年が経過した失独者が多かった。2)失独QQグループのトピックの傾向として、現実的なテーマへの関心が高まっていた。具体的には、老後の生活、権利の保護、健康に関する問題が主要なトピックとして浮かび上がった。特に「老後の生活」はこの集団にとって避けられない問題であり、最も懸念される課題でもあった。90日間の期間で、特定の失独者向けQQグループ内で「老後の生活」、「権利の保護」、「健康」、「日常生活」、「子ども」の5つのキーワードを基に集計した結果、「老後の生活」が239回という高頻度で言及され、他のキーワードと比較して顕著に多かった。その次に多かったのは「権利の保護」で156回、「健康」が94回と続いた。さらに「日常生活」は76回、「計画出産」は69回、「子どもの養子縁組」は65回の言及が確認された。

考察

本研究は、中国における失独者への心理的援助の現状の概観と課題の探索を目的とし、関連論文9件をレビューした。レビューを通じ、いくつかの失独者に対する心理的援助の現状を確認することができた。また、9件の論文で実証された主な援助手法として、心理専門家による「心理カウンセリング及び治療」と「グループ療法」、ソーシャルワーカーによる「ケースワーク」と「グループワーク」、「失独者の自助」という5つの主要な心理援助手法が特定された。これらの手法は、提供者の専門分野に基づき、さらに「心理専門家による心理的援助」「ソーシャルワーカーによる心理的援助」「失独者の自助」という3つのカテゴリーに再分類された。以下では、心理専門家とソーシャルワーカーによる心理的援助の相違点について簡潔に説明した後、これら3つのカテゴリーに従い、各心理援助手法とその効果・課題を基に、中国における失独者への心理的援助の全体的な現状や課題についての考察を展開する。

心理専門家とソーシャルワーカーによる心理的援助の相違点

心理専門家が提供する心理的援助は、主に心理学の理論に基づいており、失独者の心理的課題への対応を中心としている。一方、ソーシャルワーカーは、社会学の視点を基盤として、社会的関係やその他の複合的要因を考慮する。失独者が直面する心理的苦痛、経済的課題、老後のケアなどの問題は、ケースワークやグループワークを通じてアプローチが可能である。そのため、失独者への心理的支援において、ソーシャルワーカーの役割は極めて重要であると言える。

心理専門家とソーシャルワーカーの介入の違いは、理論的背景だけでなく、サポートを求める対象者の背景にも関連している。心理カウンセリングを受けるクライアントは、大抵自発的に訪れるか、専門家からの紹介で来院する。しかし、ソーシャルワーカーの援助対象者は多岐にわたり、自ら援助を求める人だけでなく、ソーシャルワーカーが積極的にアプローチをすることでニーズが判明する人々も含まれる(彭, 2017)。実際、失独者の多くは高齢者で、心理カウンセリングの認知度が低く、心理カウンセリングを自発的に受ける人は少ない。このため、ソーシャルワーカーの介入は、心理カウンセリングの存在を知らない、または受けることを希望しないが、心理的サポートが必要とされる失独者のために、非常に価値あるものとなる。

心理専門家とソーシャルワーカーの対応や介入方法もそれぞれ異なる。心理専門家は、様々なアプローチにもとづき(例:箱庭療法、瞑想、催眠等)クライアントとの対話を深める(姜, 2014)。一方、ソーシャルワーカーは、問題指向的に、面談を通じてクライアントとの信頼関係を築き、社会的リソースを活用して失独者へのサポートを行う。ソーシャルワーカーのアプローチは、クライアントがなるべく自立した社会生活を送れるように支援することに重点が置かれている。

心理専門家による「心理カウンセリングおよび治療」と「グループ療法」

心理専門家が失独者に提供する心理的援助の手法には、主に「心理カウンセリングおよび治療」と「グループ療法」があった。これら2つの手法の違いとして、個別的介入と集団的介入という点が挙げられる。どちらの手法も失独者の心理的健康の改善に効果的であると指摘されている。多くの研究によると、失独者は心理的な苦痛を頻繁に経験しているため(張他, 2017; Cao, Yang, & Wang, 2018; 張・賈, 2019)、心理専門家の介入が不可欠である。杭他(2015)によれば、心理カウンセリングは失独者の抑うつや孤独感を効果的に軽減する。高他(2015)はマインドフルネスストレス低減法が失独者のネガティブな感情や孤独感、抑うつを改善すると指摘している。朱(2022)と王(2017)も、それぞれ集団認知療法やグループ療法が失独者の抑うつや不安障害の改善に有効であると報告している。このように、「心理カウンセリングおよび治療」と「グループ療法」は失独者の心理的健康を改善する手法として注目されている。

心理カウンセリング及び治療の強みは、個別対応が可能でプライバシーが確保されるため、失独者との対話が深化し、問題の核心に迫ることが容易になる点にある(姜, 2014)。また、オンラインカウンセリングは対面カウンセリングに比べ、利便性や匿名性が魅力となり、失独者のカウンセリング受診のハードルを下げる要因となる

(Young, 2005)。しかし、オンラインの環境では、握手や肩をたたくといった身体的なサポートができないため、カウンセリングの質や効果が変わる可能性があり(杭他, 2015)、対面カウンセリングのほうが、オンラインカウンセリングと比べて孤独感の軽減効果が高いとされている(杭他, 2015)。

心理カウンセリング及び治療の課題として、サービスへのアクセスのしにくさや、失独者自身の心理的援助に対するスティグマや知識不足がハードルとなり、本来サービスを受ける必要がある人々がそれを受けられない現状がある。

グループ療法の効果と課題について、グループ療法は失独者の心理的健康を向上させる効果的な手段として認識されている。しかし、実施のタイミングは慎重に選ぶべきである。特に急性期の心の痛みを抱える人々にとっては、集団的介入が適していないこともある。また、グループ討論の中で、参加者の認知プロセスが混乱する可能性や、それが他の参加者にトラウマをもたらすリスクも考慮すべきであると指摘されている(王, 2017)。適切な実施のためには、カウンセラーの高度な専門的スキルが求められる。加えて、遠隔地に住んでいる人、移動が困難な人、または時間的制約がある人にとっては、対面のグループ療法の利用が難しい場合もある。

心理専門家による心理介入モデルの中では、心理力動的モデル、家族システムモデル、認知行動モデルが主要である(徐・劉, 2017)。特に認知行動療法は、幅広く使用されている心理治療技法で、個別または集団(朱他, 2022)セッションの両方に適用可能である。また、本レビューでは学位論文は取り上げていないが、選別の過程で除外された学位論文の中には、音楽療法(于, 2019)や絵画療法(屠, 2021)が失独者の心理的健康の改善に有効であると述べられているものもある。

心理専門家が心理的援助を提供する際には、技術や手法を提供するだけでなく、失独者の内面の声を真摯に受け止め、それに応じたサポートを提供し続けることが求められるのである。心に深い傷や苦しみを抱える失独者たちにとって、適切な心理的援助は、再び希望を見出す大切な一歩として機能することが期待される。

ソーシャルワーカーによる「ケースワーク」と「グループワーク」

ソーシャルワーカーの援助手法として、ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークの3つの主要なアプローチが存在する。その中でも、失独者の心理的援助の文脈において、ケースワークとグループワークが特に重要であることが示唆されている。一方、コミュニティワークは、失独者のソーシャルサポートの再構築の側面で、多用されている。

ケースワークに関して、楊・李(2018)は、Susman(1983)のアクションリサーチモデルを基にした手法が失独者の心理的健康の改善に有効であることを指摘している。このモデルは、問題の診断・定義、行動計画の策定、行動の実施、問題の再評価、総括的な反省の5段階で構成され、危機介入、グリーフケア、心理的回復の3つのアプローチを取り入れている。また、陳(2022)は、ソーシャルワークの視点から見たナラティブセラピーが失独者の生命意義感を高める効果があることを明らかにしている。

ケースワークの課題の一つは、失独者がソーシャルワーカーに過度に依存するため、自己助成の機会が減少する恐れがあるという点である。また、ソーシャルワーカーと失独者の亡くなった子の年齢が近い場合、失独者はその子への感情をソーシャルワーカーに転移する可能性がある。中国の多くの都市におけるソーシャルワーカーの高い離職率を考慮すると、失独者は再び別離の経験をする事になり、さらなる課題を生み出すこととなる。これはグループワークでも共通の課題である。このような課題を防ぐためには、中国社会におけるソーシャルワーカーの待遇改善と、離職率を下げるための努力が求められる。また、ソーシャルワーカーは介入時に、失独者の転移という防衛機制的発生を避けるように努力すべきである。

グループワークについて、程・程(2020)によれば、アウトドア活動の参加や相互支援、協会の活動、他者への援助などは、失独者の社会的交流や活動の範囲を広げ、自己価値の認識を強化するものとされている。程・程(2020)の研究は、典型的なグループワークとは異なるアプローチを採用している。一方、典型的なグループワークを採用した趙(2021)の研究では、ストレングス・パースペクティブ、エンパワーメント理論、活動理論に基づくグループワークが、失独者の人間関係の敏感さや抑うつ、恐怖感に対して有意な改善効果をもたらすことが示されている。

しかし、グループワークにも課題が存在する。特に、グループメンバーのニーズへの対応が不十分である場面

や、ソーシャルワーカーへの専門的スキルの要求が高まることが挙げられる（趙, 2021）。遠隔地に住んでいたり、移動が困難だったり、時間的な制約があったりするなど、適用が難しい場面も考えられる。グループワークを行うグループは、その性質に基づいて、支援的なグループ、社交・娯楽的なグループ、刺激的なグループ、治療的なグループ、現実認識的なグループという5つのグループに分けられるので（Gaffey et al., 2018）、ソーシャルワーカーは介入の過程で、失独者の異なる特徴に基づいて適切なグループを選択することによって、彼らの心理的健康を最適に改善することが期待される。

失独者による自助

失独者の自助グループとは、失独者が心理的慰めや相互支援を求め、自発的に形成した組織のことを指す。実際に、非失独者との交流中、失独者は劣等感や挫折感を時折感じ、社会的交流を避ける傾向があると言われている（張他, 2017）。しかし、彼らは孤独な生活を送っていたとしても、他者からの関心や支援を求める姿が見受けられる。このことから、同じ境遇の家族同士での自助グループに参加する失独者が増えていると考えられる。特に、中国の人気SNSであるQQには、失独者向けの44のグループが存在し、これらのグループはオフラインでの活動も頻繁に行っていた（劉, 2014）。

失独者の自助の効果については、心理的健康の改善に効果があることが確認されている。例えば、尹他（2018）は、コミュニティベースの自助式中国画学習グループが失独者に与える効果は、感情や認知能力の向上、不合理な信念の調整、人生の意義の再確認など多岐にわたると示されている。また、自助グループの参加者は、政府や地域社会、公益団体、メディアからのフォーマルなサポートを多く受けている（陳, 2017）。このようなサポートが、失独者を正常な社会生活への適応を促進する要因となっている（王・劉, 2013）。従って、これらの研究結果は、失独者自助が心理的援助に有効であることを裏付けている。集団心理的介入やグループワークと比較すると、失独者の自助は広く普及しており、グループリーダーへの専門的な要求が低く、グループメンバーの積極性が高いという利点がある。

しかし、失独者の自助にも課題は残っている。1つ目は、自助グループに参加することで社会参加の機会が増える一方、その交流は主にグループ内に限定されている傾向があるという点である（陳, 2017）。失独者同士の共通の経験や感情が、彼らを非失独家庭との交流から遠ざけている。結果として、親しい友人や家族からのインフォーマルなサポートが不足している可能性がある（陳, 2017）。2つ目は、自助グループのメンバーの感情や考えが極端になる恐れがあり、その結果として政府や社会に対する不満が表現される可能性があるという点である（劉他, 2020）。最後に、グループ内のメンバーは心理学の理論や治療技術に疎いため、他の失独者への心理的援助の質が制限されているという点が挙げられる（劉他, 2020）。そのため、政府や大学は、失独者の自助グループに心理学的知識や治療技術の研修を提供する必要があると考えられる。研修により、グループメンバーが心理的援助を効果的に行うことが可能になる。また、政府は、団体の活動監督や、適切な要求の伝達をサポートする役割を果たすべきである。

失独者への心理的援助の実例が不足している原因

本研究では、中国における失独者への心理的援助に関する論文を9件レビューした。これらの9件の実証研究はすべて市や市以下の行政区画（例：区や町）で実施された。中国には691の都市が存在することを考慮すると、失独者への心理的援助が不足しているとの指摘（丁, 2013）が理解できる。この不足の背後には、文化的、社会的、経済的な要因が考えられる。

まず、文化的背景としては、中国に深く根付いている伝統的価値観、特に「因果応報」（陳, 2016）や「伝宗接代」が、失独者が社会的スティグマ（安・徐, 2018）を感じる一因として挙げられる。これらの価値観が、子を失った親たちにとって、その経験や心境を他者と共有することを難しくさせている。それに伴い、心理的援助を求めることが、一部の人々にとっては避けるべき行動となってしまう可能性がある。

次に、社会的な背景からすると、心理的援助そのものに対する認識の不足も、このような不十分さの背景の一因である。特に、心理カウンセリングや治療が西洋由来のものとしてされ、中高年層の失独者が受け入れづらくなっていることが、心理的援助の普及を妨げている可能性がある。

さらに、経済的なリソースの不足も無視できない。専門家やカウンセリング施設などが足りない地域、特に農村部では、適切な心理的援助を受けることが難しい状況となっている。このリソースの不足は、物質的援助と心理的援助との間での資金配分の議論にも現れている。

これらの要因が複合的に影響し合い、心理的援助の不足が生じていると考えられる。

結論と展望

本研究では、CNKIデータベースを使用し、失独者を対象とした論文を中心に、中国における失独者への心理的援助の現状と課題を検討した。本レビューの結果、主要な心理的援助方法は以下の5つに分類される：(1) 心理カウンセリングと治療、(2) グループ療法、(3) ケースワーク、(4) グループワーク、(5) 失独者の自助。しかし、これらの方法はそれぞれ課題を抱えている。例えば、心理カウンセリングの受け入れ率が低いこと、グループ療法の適切なタイミングの選択問題、ケースワークにおける過度の依存や転移のリスク、グループワークのニーズへの適合性の問題、失独者の自助による非失独家庭との交流の低下などが挙げられる。

上述の5つの心理的援助方法はすべて他者からのサポートが必要であるが、技術の進展を反映し、多くの自助方法がインターネット上で提供されている。その代表例として、スマートフォンアプリを通じたマインドフルネス瞑想が挙げられる。現在の中国の失独者向け心理的援助の中で「自助」と称されているものは、実際には「失独者間の相互援助」を指すものであり、「本人から自分自身に対する行動や認知の変更などの自助」とは異なるとも考えられる。今後の研究では、真の自助の方法が失独者の心理的援助にどのように影響を及ぼすかを詳しく調査する必要があると考えられる。

加えて、失独者のニーズを適切な理解と、それに応じたサポートの提供が重要である。失独者が抱える心の傷や苦しみに真摯に向き合い、適切な援助を通じて新たな希望を見出すことが重要である。東アジア地域における社会変化や少子高齢化の問題には共通する要素があるため、中国の経験から学ぶことで、日本における問題に対する理解を深めることも期待される。

利益相反の表示

本論文に関して、開示すべき利益相反に関する事項はない。

【引用文献】

- 安真真 & 徐晓军. (2018). 社会边缘群体的生成与再生产——以失独父母边缘化研究为例 (社会のマージナルなグループの生成と再生産—失独両親のマージナリゼーションの研究を例に). *南方人口*, (1), 70-80.
- Cao, X., Yang, C., & Wang, D. (2018). The impact on mental health of losing an only child and the influence of social support and resilience. *OMEGA - Journal of Death and Dying*, 80(4), 666-684.
- 陳恩. (2013). 全国“失独”家庭的規模估计 (中国の“失独”家族の規模推定). *人口与发展*, (6), 100-103.
- 陳恩. (2016). 农村失独者的心理困境——基于江苏省若干案例的讨论 (農村地域の失独者の心理的な困難—江蘇省の複数の事例に基づく考察). *西北农林科技大学学报 (社会科学版)*, (5), 29-36.
- 陳婷. (2022). 叙事疗法介入失独老人生命意义感提升的个案研究 (ナラティブセラピーを介した失独者の生命意味感の向上の事例研究). 华中农业大学, 硕士学位论文.
- 陳文華. (2017). 两类失独家庭的社会支持比较研究——兼论失独自组织的影响 (二つのタイプの失独家庭におけるソーシャルサポートの比較研究—失独者の自助グループの影響を中心に—). *社会工作与管理*, (5), 63-72.
- 程激清 & 程秀敏. (2020). 集体赋权视角下的情境叙事研究——基于D协会服务失独群体的案例分析 (集団エンパワメントの視点からのシチュエーションナラティブ研究—D協会の失独者への援助事例を基に). *社会工作*, (2), 97-107+112.
- 丁寧. (2013). 给付行政心理援助制度的构建——基于失独家庭的人文关怀 (给付行政の中での心理援助システムの構築—失独家庭に対する人文的ケアに基づく). *西南政法大学学报*, (4), 61-67.
- Gaffey A. E., Aranda F., Burns J. W., et al. (2018). Race, psychosocial vulnerability and social support differences in inner-city women's symptoms of posttraumatic stress disorder. *Anxiety Stress & Coping*, 32, 1-14.

王 中国における一人っ子を亡くした親への心理的援助の現状と課題

- 高莉娟 & 吳振華. (2015). 我国“失独家庭”问题研究综述 (中国における「失独」問題に関する研究のレビュー). *山东女子学院学报*, (3), 43-48.
- 馮乃林, 胡英, 武潔, 楊建春 & 肖寧. (2015). 中国失独妇女及其家庭状况研究 (中国における失独母親およびその家族の現状に関する研究). *调研世界*, (5), 3-8.
- 杭榮華, 陶金花, 吳明飛, 張雪嬌 & 董亞歌. (2015). 心理咨询对失独者抑郁症状和孤独感的疗效观察 (失独者に対する心理カウンセリングの抑うつと孤独感への介入効果の観察). *中国临床心理学杂志*, (2), 369-371.
- Harper, M., O'Connor, R. C., & O'Carroll, R. E. (2014). Factors associated with grief and depression following the loss of a child: a multivariate analysis. *Psychology, Health & Medicine*, 19(3), 247-252.
- 何麗, 唐信峰, 朱志勇 & 王建平. (2014). 殇痛:失独父母哀伤反应的质性研究 (殇痛:失独者における悲嘆反応の質的分析). *中国临床心理学杂志*, (5), 792-798.
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. (1967). The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11(2), 213-218.
- 姜海燕. (2014). 交融与独立——社会工作与心理咨询关系探索 (ソーシャルワークと心理カウンセリングの関係探索). *广东工业大学学报*, (01), 36-43+91-92.
- Leahy, J. M. (1995). A comparison of depression in women bereaved of a spouse, child, or a parent. *OMEGA-Journal of Death and Dying*, 26(3), 207-217.
- 劉洪鳳, 余桂林, 孫嬋媛, 陳代軍 & 余銀. (2020). 失独老人自组织对失独者创伤后应激障碍进行心理援助的可行性研究 (失独者の自助グループによる失独者の心的外傷後ストレス障害への心理的支援の可行性についての研究). *花炮科技与市场*, (1), 99.
- 劉中一. (2014). 失独QQ群及失独者网络聚集现象研究 (失独QQグループおよび失独者のオンライン集合現象の研究). *国家行政学院学报*, (1), 98-102.
- 柳志艷. (2012). 勇敢地生活下去——呼唤社会关注失独者群体 (勇敢に生きていく - 失独者集団に社会的注意を呼びかける). *学理论*, (20), 57-58.
- 彭灵灵. (2017). 心理咨询与社会工作的异同辨析及应用 (心理カウンセリングとソーシャルワークの相違点と共通点の分析および応用). *社会工作与管理*, (06), 41-46.
- 戚克維. (2015). 我国失独家庭心理援助及相关立法完善分析 (中国の失独家庭への心理支援および関連法制度の改善に関する分析). *中国市场*, (30), 159-160.
- Richards, D., Timulak, L., & Hevey, D. (2013). A comparison of two online cognitive-behavioural interventions for symptoms of depression in a student population: The role of therapist responsiveness. *Counselling & Psychotherapy Research*, 13(3), 184-193.
- 屠佳玉. (2021). 绘画疗法团体辅导疏解失独老人抑郁情绪的干预研究 (絵画療法のグループ療法が失独者の抑うつ症状を緩和する介入に関する研究). 南京理工大学, 硕士学位论文.
- 王広州. (2013). 独生子女死亡总量及变化趋势研究 (一人っ子の死亡数及びその変動に関する研究). *中国人口科学*, (1), 57-65+127.
- 王広州. (2016). 中国失独妇女总量、结构及变动趋势计算机仿真研究 (中国の失独母親の数、構造、および変動のコンピュータシミュレーション研究). *人口与经济*, (5), 1-11.
- 王海琴, 金輝華 & 姬文慧. (2017). 团体心理干预对失独家庭成员抑郁、焦虑情绪及生活质量的影响 (失独者において集団心理的介入が抑うつ、不安、および生活の質に与える影響). *上海医药*, (4), 51-53.
- 王寧 & 劉珍. (2012). 失去独生子女家庭的社会互动与组织参与——基于情感能量视角的分析 (一人っ子を失った家族の社会的相互作用と組織への参加—感情エネルギーの視点からの分析). *华中师范大学研究生学报*, (4), 63-67.
- 肖雲 & 楊光輝. (2014). 优势视角下失独老人的养老困境及相应对策. (強みの視点から見た失独者の介護の困難および対応策) *人口与发展*, (1), 107-112.
- 徐曉軍 & 劉炳琴. (2017). 失独人群的创伤后应激障碍及其心理援助 (失独者の心的外傷後ストレス障害及びその心理的支援). *武汉大学学报 (人文科学版)*, (2), 122-128.
- 楊榮 & 李玉芬. (2018). 从绝望到重生:社会工作介入失独老人心理帮扶的行动研究 (絶望からの再生:失独者の心理援助におけるソーシャルワークのアクションリサーチ). *社会建设*, (1), 32-41.
- 姚政宏. (2020). 基于互惠模式的失独老人心理帮扶体系构建 (互惠モデルに基づいた失独者の心理支援システムの構築). *法制与社会*, (31), 108-109.
- 尹若月, 修代明 & 何麗. (2018). 基于社区的自助式国画学习小组对失独者心理健康的干预效果 (コミュニティベースの自助式中国画学習グループを用いた失独者の心理健康の向上研究). *中国临床心理学杂志*, (6), 1234-1239.
- Young K. S. (2005). An empirical examination of client attitudes towards online counseling. *Cyberpsychology & Behavior: The Impact of the Internet, Multimedia and Virtual Reality on Behavior and Society*, 8(2), 172-177.
- 於豐. (2019). 音乐治疗在失独者哀伤辅导中的应用研究 (音楽療法が失独者の悲嘆のカウンセリングにおける適用に関する研究). 武汉科技大学, 硕士学位论文.
- 張瀚罡. (2019). 失独家庭社会支持网络建构探究——以“新希望家园”为个案 (失独家庭のソーシャルサポートネットワークの構築に関する

- 探索—「新希望家園」を事例に). *中国全科医学*, (S2), 240-243.
- 張雯, 王安妮, 郭玉芳, 姚抒予, 羅媛慧 & 張靜平. (2017). 失独者自我效能感在社会支持和抑郁情绪间的中介作用 (失独者の自己効力感がソーシャルサポートと抑うつとの間の媒介効果). *中南大学学报 (医学版)*, (7), 836-842.
- 張宇迪 & 賈曉明. (2019). 失独者喪失特征与心理健康的关系研究 (失独者の喪失特性と心理的健康との関連についての研究). *中国全科医学*, (22), 2749-2754.
- 趙文嘉. (2021). 小组工作介入失独老人精神慰藉研究 (ソーシャルワーカーによるグループワークを通じた失独者の心理的支援への介入研究). 中南财经政法大学, 硕士学位论文.
- 周学馨 & 劉美華. (2020). 我国失独家庭养老体系中机构养老兜底保障作用研究——基于对全国709个失独者调研数据的分析 (失独家庭の介護システムにおける施設介護の役割に関する研究—中国709人の失独者調査データを基にした分析). *重庆社会科学*, (1), 82-93.
- 朱景新, 陳麗雲, 余燕飛 & 杜昊. (2022). 团体认知行为治疗失独者焦虑、抑郁情绪的疗效研究 (集団認知行動療法を用いた失独者の不安・抑うつへの介入効果). *上海医药*, (16), 59-62.
- 朱智佩, 方黎, 周国權 & 魯威. (2019). 失独家庭心理健康及心理援助研究进展 (失独家庭の心理的健康と心理的支援に関する研究の進展). *中国健康心理学杂志*, (6), 954-957.
- Zimmer, Z., & Kwong, J. (2003). Family size and support of older adults in urban and rural China: current effects and future implications. *Demography*, 40(1), 23-44.

